

『満州国演義』(船戸与一著)を読んでみた(数年かけて読破)。

本作は、原稿用紙 7500 枚、文庫本 600 頁で全 9 冊の超大作。未曾有のスケールで描かれる冒険大河ロマン。本書を書き上げて 2015 年に 71 歳で他界している。これまで『山猫の夏』(1985 年)、『伝説なき地』(1989 年)、『砂のクロニクル』(1992 年)等、抑圧されている者の視点に立つての作品を数多く書いている。また外浦吾朗の筆名で『ゴルゴ 13』の劇画原作を多数提供している。

第二次大戦前夜から物語は始まる。歴史上の人物が多数実名で出てくる。その中に架空の四兄弟を設定して物語は進んでゆく。歴史的な事実を変えることなく、この四人の視点から語られる。

麻布・霊南坂の名家に生まれながらも外交官(長男)、馬賊の長(次男)、陸軍士官(三男)、劇団員の早大生(四男)と立場を全く異にする四兄弟が、運命によって導かれた満州でみたものがそれぞれの視点で綴られてゆく。軍部の暴走をめぐり対立する長男と三男、流されるままに謀略馬賊として軍に協力することとなった次男、上海に潜伏する四男。満州、そして上海で戦火が炸裂する。国際世論を押し切り、新京を国都とする満州国が建国された。四兄弟は満州の地に集うが、満州をめぐる人々の欲望はますます膨れ上がり、少しずつ常軌を逸していく。脅威を増す抗日連軍、天皇機関説に揺れる帝都。満州国の混沌が加速するなか、外務官・馬賊・憲兵大尉・武装移民と、別々の道を歩んだはずの四兄弟の運命が重なってゆく。「2.26 事件」に揺れる満州も描かれる。

昭和 12 年、ついに日本と中国は全面戦争に突入する。勢いを増す戦火は上海、そして南京へ…。四兄弟が人生の岐路に立つとき、満州国の命運を大きく揺るがす事件「南京事件」が起きる。昭和 13 年、日中戦争が泥沼化する中、極東ソ連軍が南下。石原莞爾の夢が破れ、甘粕正彦が暗躍する満州に、大国の脅威が立ちはだかる。「ノモンハン事件」も描く。昭和 16 年、ナチス・ドイツによるソビエト連邦奇襲攻撃作戦が実施された。ドイツに呼応して日米開戦に踏み切るか、南進論を中断させて回避するか。「マレー進攻」から太平洋戦争開戦までを描く。

昭和 17 年、本格的な反撃を開始した連合軍に対し、大本営は事実を隠蔽し、司令官たちは精神論を振り回す。「ミッドウェー海戦」から「インパール作戦」までを描く。現在のロシアのウクライナ侵略に関する事実の隠蔽、フェイクニュースと重なり合う。歴史は繰り返す。事変の夜から 14 年が経ち、ついに大日本帝国はポツダム宣言を受諾する。敗戦後の満州、負けてなお己を貫こうとあがく四兄弟。

このような時代は二度と来てほしくない。(悲しいことに、この時代に暗躍した人物の孫が最近日本の総理大臣に就任している・・・)。ロシアや中国のように一気に暴走し、国民を抑圧する独善的な政治にならないことが、遅々として決定が進まないことが多々あっても(日本のように)、民主主義の利点ではないかと考えを新たにした。